

物乞いーあるパシユトウン患者の死 アツラーのお召し

私が駆け付けたときには、もう彼は虫の息といってよかった。十三歳の息子が、息もたえだえの父を半座位に抱え起こして茫然としていた。ペシャワールの、スラムと言うよりは、一般の人々の家並みの一角に彼の住居がある。すえたどぶの匂いと埃のたたずまいをくぐり、土壁に囲まれた彼の家に入ると、炊事場と便所を兼ねた小さな空間を残して六畳ほどの部屋が一つある。薄暗い部屋には丸太で組んだベッドが三つあり、ここに彼は七人の家族と共に生活してきた。「ドクター・サーブ」と彼は私を認めて、弱々しく、しかし絞り出すように言った。「私はここが幸せなのです。家族を離れて治る見通しのない入院生活を続けたくなかったのです。どうせアツラーのお召しなら、病院よりもここが良いのです。どうか放っておいて下さい。」

そう言ってさめざめと泣いた。いや、泣こうとしたが瞼の閉じぬ白眼は乾燥して涙の粒はあふれてこなかった。指の無くなった平たい両手でしっかりと私の手を取った。

「意地を張らずに病院に帰れ。助かるんだぞ。」と私が言うと、毅然として首を横に振った。パシユトウンらしい特有の頑固さと誇りをむきだしにしたので、私も黙ってしまった。

彼はもう六十歳になる。本当に六十歳かどうかは疑わしいが、ペシャワール・ミツシヨン病院のらい病棟のチョコキダル（門衛）として雇用された年齢に二十を足すとそうなる。しかし、正確な年齢を詮索するのは我々の余計な厳密さである。ともかく彼は、自分でもう天に召されても不思議はないと判断できる年齢に近くなったということだ。

彼はアブドウル・サタールという。故郷はペシャワールの北西、アフガニスタンのクナール州の一寒村である。ものごころついた頃から、彼は他の村の子供達と同様、家の手伝いと遊びに余念がなかった。何の変哲もない山奥の平和



な村の生活だった。

夏は羊を駆って谷から谷をカルカ（牧草地）を求めて歩き回った。春から夏は小麦の収穫、高値な米は領主様にさしだす。秋は冬に備えてたきぎ集めが忙しくなる。水汲み、小さな弟や妹の世話も大切な子供の仕事だ。学校？ そんなものは物好きの地主様のお坊ちやまの行くところだ。俺達には何の関係もない。字など覚えるのは偉いモスクのムッラー（お坊さま）の仕事だ。マドラサ（モスクでの宗教教育）で神様の事を知れば十分だ。

時折、大人たちが領主様の命令でラシユカル（戦争）に出かける。「アングレーズ（英国人）」と戦うのだという。アングレーズって何だろう。何だかよく解らないが得体の知れぬ悪い奴らだ。俺達パシユトウンとイスラムの敵だ。カーフィル（異教徒）だ。第一、地主様やムッラー様がそうおっしゃっている。

— そう信じて彼は育った。

ある時、大勢の村の男衆たちが武装し、長老に連れられて村を出た。村人は熱狂的にそれを見送った。待ちに待ったジハード（聖戦）の時が来たのだ。カシミールへ！ 我々の桃源郷を異教徒ヒンドゥたちが奪おうとしているのだ。カシミールのイスラム同胞を救うのだ、と彼は聞かされた。旧式のエンフィールド銃を手に、薬莖を肩に掛けたものものしいで立ちの男たちは、村々から集まってたちまち数百人の部隊となり、北部山岳地帯から長駆カシミールに入った。（一九四九年の第一次印パ戦争の時とほぼ一致する。カシミール争奪を巡る印度 — パキスタンの紛争に多数のパシユトウン住民が参加したらしい。）

サタールはまだ十歳前後だったがこの時の男たちの勇ましい姿が忘れられない。帰ってきた若い衆の手柄話に、眼を輝かせてうっとりとして聴き入ったものがある。自分もいつかは誇り高いパシユトウンとして生き、命を神に捧げるのだ、と何度も自分に言い聞かせた。

